

# 大江健三郎の沖繩体験

—— 大江健三郎ならびに『沖繩ノート』をめぐる沖繩からの反応をめぐる ——

柳井貴士

## 一、はじめに——ヒロシマから沖繩へ

大江健三郎というひとりの作家の冒険の道筋は多岐にわたり、フィクションである小説の生成には自らの人生の営みと、時代にもとづく社会状況が深くかかわっている。あるいはその人生のはじまりである時空間、すなわち愛媛県の山間部森の中で、戦時中に生まれたということも重要な意味を持つだろうし、また一九三五年、昭和一〇年に誕生した大江は、当時の少年少女がそうであったように、「軍国教育」を受け、まさに皇国の少年の思想を内面化していた。しかし敗戦とそれに続くアメリカを中心としたGHQの戦後処理政策をもとに、「民主主義」という新たな機軸が示され、国家、思想は変容した。その期間に多感な少年期を過ごし、かつ読書という〈ここ〉ではない場所へとつながる回路を武器にしながら育ったのが大江健三郎であり、戦中から戦後の変容とそこに生きた自己の

思考形成のあり様をことあるごとに表明していた。

二〇二三年三月に亡くなった大江健三郎への追悼として、鶴飼哲夫は次のように記している。

大江さんというと「戦後民主主義の旗手」とされるが、四国の森で育った戦中は皇国少年であり、58年に芥川賞を受賞した「飼育」の翌月に発表した「人間の羊」では、占領下の日本人の屈辱を書くなど、痛みを抱えた旗手であった。／そして、SNSの表現のようにパツと物事に単純に反応する鋭痛ではなく、じっくり注意深く鈍痛で受け止め、何度も推敲しながら新しい表現を模索する。<sup>(1)</sup>

〈鈍痛〉を感知し内在化する強い意志とともに出来事と向き合う持続力を備えた大江は、表層の情報が連鎖することで肥大化し

た空白状態を認知しながら、自らの作品と現実の出来事のアダプトーションをはかる「想像力」をもった作家であった。アジア・太平洋戦争をめぐる敗戦を受け入れつつも、刷新されることのない不可視的で強固な縦型の国家体制への大江の問いは、日本を多層的に見つめとらえることへつながるだろう。その大きな問題提起のひとつが「原水爆禁止世界大会」への参加により前景化された「核」という問題であった。広島と長崎に投下され多くの惨禍と犠牲をもたらした核兵器が、その当事国において戦後も問題をはらみつづける状況は看過されるものではなかった。

ところがわれわれを核時代に順応させようとして、いわば核時代のホモ・サピエンスとでもいうべき新種をつくろうとして、たいていの国家がやっていること、たいていの国家がやろうとしていることは、民衆にたいして核兵器の悲惨について欺瞞の宣伝をすることです。核兵器の威力をわれわれは所有している。そして核兵器の悲惨からは完全にまもられている、という矛盾にみちた宣伝をすることです。結局は核兵器の悲惨を民衆の眼から押し隠すということが、すべての国家権力のひとしくおこなっていることではないかとさえ思われます。<sup>(1)</sup>

原爆を受けた広島ならびに長崎の被爆者たちは真の癒しと解放を得ているのか。さらには敗戦を経験した日本は、その後の国際環境において真に独立国としてありえているのか。戦後の日本の「あいまいさ」は、戦中の巨大な出来事との対峙のあいまいな拒否から派生しており、それは大江の、自身も含んだ日本人への異義申立て

として思想、言説空間において、例えば以下のように問い立てられた。

そしていまも、病む者、病気をする者としての日本人を大きいメタファーで捉えなおすことをめざすならば、広島、長崎の原爆被災者を顧みるということは有効だと思えます。そこには癒される者、病気を治されて二十一世紀へ向かう者、そういう存在としての日本・日本人を考えるためのがかりもまた含まれていると私は考えています。／ところがその課題を、本当にわれわれは捉えようとしているのだろうか？ 癒される者、癒されて二十一世紀に生きる者であると同時に、相互に癒す者、癒しをあたえる者としての日本・日本人ということ、二十一世紀に向けてよく考えてきただろうか？ そのように自分に問にかけて、すぐさま私は疑いを抱くのです。<sup>(3)</sup>

そこから大江は核兵器の惨禍を経験していない非当事者性を、「想像力」を源泉とした「当事者性」へと置き換えていく。「世界的な規模による核戦争のみならず、アメリカの戦略家たちのいう、局地的な核戦争においてもまた、ヒロシマ、ナガサキの人びとをのぞいてわれわれは一般に、かつてそれを経験したことがないのであるから、核戦争の脅威を認識し、それを恐怖し、その兆しに抵抗するために、核戦争にたいする想像力の発揮が必要である」<sup>(4)</sup>の<sup>(5)</sup>。そして大江の「想像力」が広島と沖縄をつなぎとめる。

かれら（沖縄の被爆者たち―引用者）は広島、長崎に出稼ぎに

ゆくか微用されるかしてそこで働いているうちに被爆した人々である。そしてかれらは戦火に焦土となった故里にかえることよつて、かれらの犠牲によつてかちえた新しい憲法からはもとより、本土の被爆者たちにはなんとか準備された、あらゆる医療施設と保障から切り離されてしまった。<sup>68)</sup>

被爆者、そして「核」めぐり沖繩が立ちあらわれる。そこには戦前の沖繩への差別問題や戦後米軍統治下の法的な保障問題があり、さらには沖繩において思想的闘争の前線にたつ人々との接触が大江に沖繩の自立性への問いを呼びこむことになる。佐々木誠のインタビューに大江は次のように答えている。

「……」なぜ、沖繩を核にすえるかというと、日本は琉球処分  
いらい、ずっと沖繩を踏みつけ、犠牲にしてきたでしょう。だ  
から、その沖繩からみると、日本人のゆがみが実に良くわかる  
わけですね。沖繩の光を日本にあててみると、今までヨーロッパ  
やアメリカの光をあてた時にはわからなかった、日本人独特  
のいやらしさというか、暗さというかが、具体的に見えてくる  
ように思うわけです。<sup>69)</sup>

そこで次節から、「核」をめぐる広島から沖繩へとつながった大江  
の思想についてみていきたい。

## 二、現前化する沖繩

ここでは、大江健三郎『沖繩ノート』<sup>70)</sup>を概観していく。

まず大江は『沖繩ノート』の「プロローグ」において友人古堅氏にふれる。古堅氏の死とそれを報じる新聞の「焼死体」という誤報は、出来事の細部への視点をもたず、出来事の総体から安易に導き出される「結果」を言葉に転移させたものにすぎない。ここでの大江にとつての言葉の重要性とは、対象をいかに「想像力」の範疇に再生するかである。その意味では、古堅氏を語る誤報＝言葉の軽さの奥にある、古堅氏の生涯を刻印する「プロローグ」は大江の立場表明である。古堅氏は沖繩返還運動の現場へ「日本国憲法」を印刷した文章を送る作業に情熱を込めた。それは「憲法にまもられぬ沖繩に、武器としての憲法を政治的想像力の根底に据える態度」（八四頁）である。強権的なアメリカと対峙し得る根本的な方法であり、人権を守る権威の不在の怒りである。その怒りの正当性と感受し、同時に恥を感じる者は、その矛先を自身に向け、戦後における日本国民としての生存の根拠にアメリカと沖繩の關係を見出しうる可能性が「プロローグ」において示唆される。次に大江は「日本が沖繩に属する」において、日本人とは何かについて、沖繩をとおして問い立てていく（後述）。

さらに『八重山民謡誌』<sup>71)</sup>では沖繩の核兵器の存在についてふれられる。沖繩の遍在する米軍基地と、B52戦略爆撃機の墜落事故について、さらに知花弾薬集積所が火の海と化した事故をとおして核兵器の存在へと接近していくのである。

我部政明は「核と沖繩」<sup>72)</sup>において「1967年には、最大規模の約1200発の核が沖繩に配備された。当時のアジア太平洋地域配備数（3200発）の内、沖繩配備が3分の1を占め

ていた。60年代から72年まで、アジア太平洋地域は、韓国、  
グアムよりも沖縄が最大の核配備場所となっていた」と報告し  
ている。「沖縄の核兵器の実在ということにむかつて、あいまいなも  
のいい段階から、しだいに言葉が明確になり鋭くなり的確になっ  
てゆく。ついに確実に言葉は、その核心を射あてる。迷彩網は剥ぎ  
とられる。沖縄の民衆が、核兵器の存在を具体的にそのイメージの  
うちに把握する」(『八重山民謡誌』<sup>69</sup>、一一三頁)と大江は記す。  
また「多様性にむかつて」では次のように述べている。

核のカサのあいまい主義になんとか安住しようとする、その場  
しのぎの意識と、沖縄における核兵器の、ほかならぬ沖縄の民  
衆にたいする現実的な意味あいを、はつきり考えてみようとし  
ないわれわれ本土の日本人の意識とは、結局は同一のものであ  
る。ただ、後者には沖縄の民衆への露骨な裏切りの心情が色濃  
くそめあげられているということのみを判断しうるだろう。(一  
二六頁)

日本人である自らが、(日本人)であるというこの責任において、  
ここでは大宅壮一の述べた沖縄戦をめぐる沖縄県民の「動物的忠誠  
心」という言説が注目される。外間守善の「沖縄における若者た  
ちの動物的忠誠心を批判する場合、それを支える歴史的背景、社  
会的状況についても、分析考察するという配慮がなければ、片手落  
ちだと思えますし、沖縄の歴史を誠実に生きた人たちに對して、  
不誠実であり、歴史の全体像を組立てるのにも、正確を欠くので  
はないかと、私はそれを案じます」(一三四頁)との言説が報告さ

れ、出来事が包含する時間的・空間的な視点を論考する必要性が  
問われる。それは「琉球処分」にはじまる本土化の歴史の在り様  
を多角的に見ることであり、戦後の(日本)がいかなる犠牲を不  
可視化して発展を目指しているかの、その欺瞞の前景化の試みなの  
である。

本書はさらに「内なる琉球処分」において「世界の中心としての  
日本という「中華思想」的感覚があり、少なくともアジアの中心  
としての日本というその感覚があり、たとえば僕のそもそものはじ  
めの命題たる、日本が沖縄に属する、というような発想には、肉  
体および精神の奥底を逆なでされる不愉快を感じるのが一般」(一  
五二頁)と記し、また明治から昭和にかけての沖縄の言論人、伊波  
普猷をとおして「自立」について問い立てる「苦が世」、憲法につい  
てふらられる「異議申立てを受けつつ」と続く。

さて僕はいま、沖縄の戦後世代による演劇と実生活における  
一貫した持続をたどってきて、もうひとつの暗く恐しい  
持続的なもの実在に、しかも『創造』の持続の光が照らし  
だす、影としてのようなその実在に、あらためて意識をひきつ  
けられざるをえない。それはほかならぬ、日本と日本人とが、  
沖縄からのまともな抗議の声をまつこうから押しつぶし、踏み  
にじるようにして、いわば、真に沖縄的なものを根こそぎ潰  
滅させる方向にむかつて、いかに持続的に歪んで行ったか、いか  
に持続的に傾斜してきているか、という認識である。(戦後世  
代の持続」二二四〜二二五頁)

そしてここでは沖繩が自律性を保つことの困難な状況が、政治的な圧力により進行していることを大江は告発する。新川明や幸喜良秀、中里友豪に仲宗根政善らをさしはさむことで、沖繩の声に寄り添う姿勢を示す。

では大江の言説は同時代においてどのように捉えられていたのかその一部にふれていく。例えば三木卓は「これらのエッセー群のバックグラウンドを流れているのは、『鯨が死滅する日』という題名が象徴しているようなわれわれの世界の危機にいかしたら拮抗し得るような魂をわれわれが持ち得るか、ということである」<sup>1</sup>、「それは当然、われわれの魂を欺瞞へ追い込んでいくもの、われわれを偽りの行為へ追いやるうとするものに対する戦闘を呼び起こさずにはいない」<sup>2</sup>（『読書』『読売新聞』一九七二・三・三）と、世界の危機へ拮抗する魂についての書であると述べている。一方、「沖繩と本土とを極端に対比するという単純化をおこなっていることに、私はおどろきに近い感想をもたざるを得ない」（『問題を「持続する志」——大江健三郎『沖繩ノート』』『谷川健一コレクション』<sup>2</sup> わが沖繩『富山房インターナショナル』二〇二〇・二、一九頁）とする谷川健一は「大江氏の沖繩イメージの単純化の原因は、彼が沖繩にむかつて執拗に呼びかけながら、その声が背後の本土の人たちによりよく聞こえることを期待しているからだ」と私には考えられる。つまりこれは結局本土むけの「沖繩ノート」だ（同書、二〇頁）と指摘しており、沖繩の問題をめぐる大江の「当事者性」が谷川に見られていない。

大江の『沖繩ノート』は以下のようにつくづく。

沖繩戦にむりやりひきずり出されながら、生き延びることの

可能性については客観的にも、主観的にもそれを想像する力をうばわれている者たちとして、酷たらしく死んだ沖繩の娘たち（ひめゆり学徒隊—引用者）の死は、いわば琉球処分以後のすべての沖繩の、望ましい日本人たろうとつとめた女性たちの歴史的つながり総ぐるみにおいての死であった。しかし首相の涙は、それらの沖繩の娘たちの、死を、抽象的な架空の娘たちの死と同一のものへと単純化したのである。（『日本の民衆意識』、二二六頁）

僕はこの沖繩ノートを到底、自分の内部において閉じることができないが、それは僕自身における戦後民主主義について、自分のうちがわの暗く血の匂いのする深みに、スクリーンのようにも自分自身をねじこみつづけるための手がかりとして、それを強く必要とするからである。（『本土』は実在しない）二五四頁）

後の大江健三郎と岩波書店をめぐる沖繩戦裁判につながる言説が展開する「『本土』は実在しない」において、大江の倫理的想像力は「旧守備隊長」が渡嘉敷島へ渡ることへの問い立てを行っている。どのような「幻想に鼓舞され」、旧守備隊長は自ら惨劇をもたらした島へと、戦後になって渡るのか。そこには「自己欺瞞と他者への瞞着の試み」があると述べられる。「希薄化する記憶、歪められる記憶にたすけられ罪を相対化する」ことで、自己弁護の可能性が開かれる。自己中心的な他者の（人生、自ら追いやった死の現実の）根底を顧みない弁解は、「エゴセントリックな希求につらぬかれた幻想」

であり、集団死という出来事を内在化せず、涙の共同体を構築しながらの安易な和解を求めることにほかならないのではなかったか。(核)をめぐり広島から沖繩へとつながる大江健三郎の思想は、日本人である自分の位相を未決にしながら、復帰以前の沖繩(人)との連帯を模索していた。しかし次節でみるように、その言説は沖繩側と連携を示しつつ、同時に齟齬も見出せるだろう。

### 三、沖繩からの応答

大江健三郎の言説に沖繩の言論・知識人はどのように反応したのか。一九五三年に「若い人達よ真実であれ」との巻頭言をもって創刊された『琉大文学』出身の新川明は以下のように述べている。

たとえば日本の人たち、とりわけ積極的に沖繩とかかわろうとする知識人は、一種の原罪意識をもってみずからを律するあまり、「復帰」運動が必然的に内在させてきた反基地のたたかい、人権擁護のたたかい、その他のたたかいによって沖繩人みずからが獲得してきたたたかひの成果の肯定的側面だけで沖繩のすべての運動と思想を包括し、その運動が片方に不可避的に内在させてきた否定的側面について、ほとんど考慮を払わない憾みがあるように思います。(中略)私はそれはきわめて一面的で、時によるとむしろみずからの意思に反して、沖繩の歴史に対してマイナスの機能を果たしていることさえ少なくないと思われてなりません。<sup>(10)</sup>

新川は、例えば基地によって富むもの、アメリカ留学を経験しアメリカの影響によってアイデンティティを確立する者たちがいることに触れない大江が、沖繩の二側面を(正)としてしかとらえない弊害を指摘する。「原罪意識」ゆえに沖繩に対する自らの位相が図式化され、復帰運動にみられる「不可避的に内在させてきた否定的側面」に目を向けない知識人として大江を挙げるのである。アメリカ/米軍と沖繩の共犯性にも着目しなければ、真実としての姿が現前化されない。

また同じく『琉大文学』から出た岡本恵徳は、大江の「当事者性」について一定の理解を示す<sup>(11)</sup>。痛苦の共有をもつ存在として大江をとらえた岡本は、一九九五年発表の評論において、あらためて「想像力」をもって共感と痛苦の共有を示す大江を評価する<sup>(12)</sup>。

言い換えれば、沖繩や沖繩の状況、たとえば沖繩が明るいのであればその明るさを描くこと自体が目的ではない。沖繩はあくまでも光源であって、問題は「日本」および「日本人」がどのようなのか、ということなのである。(五頁)

大江氏にとって必要なのは、沖繩の状況のなかで、「日本及び日本人」が何なのかを示すもの、「日本及び日本人」はどうあらねばならないかについて何らかの形で示唆を与えるものであったのだ。(六頁)

沖繩からではないが大江を研究する柴田勝二は、『沖繩ノート』を記し沖繩に関わる大江の言説の雑多性を指摘しつつも、沖繩へ傾

倒していくその姿を以下のように描写する。

〔…〕大江の「沖繩」をめぐる言説が、沖繩の人びとの内面に同一化する想像力の産物としてよりも、「戦後民主主義者」たる自身のうちに養われた図式が、沖繩という問題に付与された趣が強いことが分かる。もともと広島島の被爆者が、それ自体で明確な運命の共通性を担ってしまうのに対して、沖繩の雑多な人びとが、それぞれ雑多な立場と意識を持つていることは当然であり、それらの一点に収束させる地点が容易に仮構されないのはやむをえない。売春のような形で、アメリカ軍の支配を受ける現状に寄生する人びとも少なくはないのである。大江の『沖繩ノート』が『ヒロシマ・ノート』と比べてインパクトの強さを持ちにくいのは、人びとの雑多な視点をあえて一点に収斂させようとする手付きによつていられる。しかし皮肉なことに大江の文学は次第に「広島」よりも「沖繩」の方向に向けて進路を取ることになったように見える。<sup>(13)</sup>

沖繩が地理的に中心から遠く離れたつも、戦後日本の政治的心性を、日本から離脱された状況において負担することが、「雑多な視点」の集中化を可能にし、沖繩に向き合う知識人大江の立ち位置を決定しているのだ。

さらに『醜い日本人』において大田昌秀は次のように指摘する。

政府のいうような単なる心情的な一体化策でなく、野党や民間団体のあいだでは、今こそ本土と沖繩にはことばの真の意味

での「連帯」が必要だと強調されている。だが、現実にはどうかと言えば、そういう声とはうらはらに、沖繩県民の本土同胞への疑惑は、逆に深まりつつある。それも皮肉なことには、佐世保の異常放射能事件や、九州大学での米軍機墜落事件などを契機として、本土同胞の基地撤去運動が高まるにつれて、「やっぱり沖繩のことは他人事ではないのだ」といったぐあい。<sup>(14)</sup>

本土知識人が沖繩の問題を自覚しながらも、つねに抽象化し、同胞であるという意識を持ちながらも、最後には他者化し、本土対沖繩という問題に帰結させ、本土の問題を優先するいわゆる日本人を大田は批判する。それは本土には起こりえない問題が沖繩で実際に現実化した際に、自分事として引き受けず、「もしも」という想像力の欠如によつて沖繩を位置づける、本土同胞への批判であった。ここに欠如するのは、大江が言及する「想像力」であり、「当事者性」をもつて考える思考方法である。他者化を容易に断行してしまう「日本人」は、沖繩に対置されるものなのだ、大田は考えている。一方で、大江の沖繩への向き合い方には「想像力」とともに、岡本恵徳が指摘した（痛苦の共有）という自己批判をふくんだアイデンティティの確立があるだろう。

戦後の沖繩が、沖繩戦の厳しい現実を受け入れながら米軍統治下に移行し、基地の島として日本から切り離され、朝鮮戦争やベトナム戦争と直面しつつ、核兵器を含有しながら政治性をはらんでいくこと、さらに日本／アメリカとの交渉によつて日本へ「返還」されること。大江は『沖繩ノート』をとおして、様々な政治的言説

において沖繩が語られながら、「沖繩」が不在化されていることに寄り添う姿勢を示しているように思える。そこには〈痛苦の共有〉あるいは、〈共苦〉の思想が見出されるだろう。例えば、新城郁夫は以下のように述べている。

大江健三郎の『沖繩ノート』に記された言葉を言葉のめぐりのままに辿っていくとき、その言葉のなから幻のように現れてくるのは、ひたすらに耳を澄まし（沖繩）を聞きとろうと深くその身を屈める大江の姿である。（中略）こうして大江は、「日本復帰」直前の政治的混乱のさなかにある沖繩からの問いにその身をさらし、この曝されにおいて自らの心身に折り返されていく政治的かつ倫理的な危機意識を、高い緊張を孕む言葉とし、これをテキストに刻みつけていく。このとき大江は、みずからを、沖繩からの声に向けて開かれた傷口としているかのようにさえある。<sup>(15)</sup>

「沖繩からの声に向けて開かれた傷口」として大江が沖繩と向き合う姿勢は、北山敏秀の指摘と重なる。北山は、新川明の記した『新南島風土記』に寄り添う大江を評価し、「強者から弱者へ、弱者からさらなる弱者へという抑圧の構造を、「沖繩ノート」を書くことを通して学び取っていき、「大江が強く自覚するのは、自らが、沖繩に核基地を配置することを選んだ「本土の日本人」という立場にいるということ」、「その立場に自らが強く縛られているからこそ、大江は、「このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」という内省のもと、冷戦構造のも

とにある自らの認識の地図を組み換えていこうとする」<sup>(16)</sup>と考察している。また村上克尚は岡本恵徳の批評をとりあげ、大江が「他者の痛み、苦しみに共振することのみを媒体とし、人びとが繋がり合い、暴力のない未来への想像力を持つて、抵抗を持続していくヴィジョンを喚起する」<sup>(17)</sup>と指摘する。『沖繩ノート』をめぐる大江の評価は、同時代の新川や谷川の読みから、新城や北山の示した大江の沖繩に向かう姿勢への評価へと変化している。それは、例えば辺野古の埋め立て問題に明らかのように目的の不明確性や、基地問題が停滞する状況下において日本政府の米国追従的な主体無き沖繩への対応が前景化するなかで、大江が向き合った対象が「弱者」であり、また「日本人」という所与性に甘んじず米軍占領下の沖繩を見つめ、自省をもつて日本／沖繩という関係を広く問い立てた思想、行動への再評価にみえる。大江健三郎というひとりの知識人の思考が、いまだ救われない社会状況と呼応している点がかがえる。

#### 四、大江健三郎と大城立裕

戦後の沖繩の言論の中心にいたのは、大城立裕であろう。大城は戦中に上海にあった東亜同文書院大学へ留学しており、戦後に沖繩へ帰還した。そこから戯曲や小説を執筆し、教員や公務員の仕事をしながら、一九六七年に「カクテル・パーティー」で第五七回芥川賞を受けている。大城は沖繩の問題を文化の問題だと述べ<sup>(18)</sup>、沖繩（人）の主体化、自律化の重要性を説いている。大城と大江は数回、対談を行っており、芥川賞受賞者両名の文学論にとどまらず、



一九六〇年代後半から一九七二年の沖縄の本土復帰をめぐる政治問題にふれている。以下は『沖縄タイムス』紙に掲載された対談である。

(大城) 個々の人権問題を考えるにしても、核の問題という大きな問題にまで広がらなければならないと思う。核が、なぜあるのかといえば、ベトナムの殺りくのための前線基地として、核をもつ沖縄基地がある。われわれの侵害された人権は、ベトナムの人たちの人権と同じレベルにあるのだという被害意識をもつ面と、加害者としての●●も持たされるという二重構造めいた被害感覚を持たされている。

(大江) (….) 少し反対です。ベトナム問題について本土の人間は加害者だ。ベトナムへの脅威となつている核基地を沖縄におしつけている。少なくとも被害者ではない。沖縄の人で核基地に賛成している人はもちろん別だが、基地があることに服従していない民衆は被害者であつて加害者意識を持つ必要はないと思います。

(大城) 私が言いたいのは、被害者意識ばかりあつて、考え、行動において展開が無いので、加害者にならないための主張をすることが、われわれの主張を強くするということだということです。<sup>(19)</sup>

ここで大城は、沖縄が持つ加害者／被害者の二重性を指摘している。「カクテル・パーティー」が示したのは沖縄が被る米軍基地からの被害だけでなく、(戦争)を通して主体化されねばならない加

害者としての側面であつた。本作には、沖縄人／日本人／アメリカ人／中国人が登場していたが、沖縄・日本／アメリカ、あるいは沖縄／日本・アメリカという戦後の構造だけでなく、日本(沖縄)／中国という関係、つまり戦時下における日本人としての沖縄県民の戦争での加害者性が問われていた。その点をふまえるなら、沖縄は米軍統治という構造下において、ベトナム戦争における加害者性を担わねばならない。一方、大江は日本／沖縄という関係を問いつてながら、アメリカを相対化している。

(大江) 沖縄が復帰すれば、軍政下で抑圧されていた人権は回復するが、基地経済にささえられていた生活権は失われるかも知れない。しかし、抑圧された人権は回復しなければならぬのだから、本土も沖縄も共通問題として考えていくのが正しいと思います。また、今までの沖縄の不思議な繁栄といったものについても考える必要があると思う。大城さんご自身、沖縄の人たちの生活権としての人権は現体制のまま復帰しても失われたいと思いますか。

(大城) 基本的には、軍事基地は否定されなければならないが、それに代わる体制づくりも考えるべきだと思う。(…)本土―沖縄の対話の必要性は、皆よくいうが、沖縄の中で対話が不足している感じもします。

ここでは、復帰後の人権問題と経済の問題が複合している。大城は沖縄内部における対話や問いの必要性に言及するのである。

大城は『沖縄ノート』に対して、「すくなくとも沖縄人への語り

かけはな」く、一見饒舌に語りかけているようでも、それに手前から反応していこうとすると、つぎの反・反応は期待できない、という感じである以上、一回限りの独白でしかない<sup>(30)</sup>と述べる。新川とも呼応する指摘であるが、「ここでは「反反応」をとおして大江の内部に喚起される沖繩の抱く「二重性」ともいえる。

それはどういふことか。

大城にとって沖繩の自律性とは、文化の自律性から生まれるものであり、自らの豊饒な文化や伝統を名指しながらその重要性を自覚することから生まれると考える。それは大江との以下の対談からもうかがえる<sup>(31)</sup>。

(大城) 沖繩への差別には、その源に日本全体の西欧崇拜があったと思うし、また沖繩では本土への劣等感と沖繩内部の離島への差別が同時にあった。それらは同時に解消すべきだし西洋への劣等感を断ち切つて、独自の文化エネルギーに目ざめるところから始めねばならない。

(大江) 日本文化に多様性を持たせなければならぬ。一つがつぶれば日本全部がつぶれるというのではなく、非常に多様なものとしてアジアに、ヨーロッパに向かつていかなければ危ういと思う。沖繩文化がその多様なものの一つとしてはつきり存在を主張する、そして本土の人間が触発されるということが必要だ。

また大江は、「日本人」という観点からアメリカをとらえ、現状での被害を受ける沖繩を連帯への「想像力」をもつてみつめながら、

日本／沖繩／アメリカⅡ（核）という構造の限界を問うていく。

大城は、大江と大田昌秀により創刊された『沖繩経験』において、六〇年代後半の沖繩における復帰運動の主体性を問いつつ、「タマエとしての復帰運動、その教宣がもたらした、幻想としての祖国へのあこがれ」を認識し、「タマエとして祖国復帰運動をすすめてきたひとたちも、ホンネとして祖国を十分に信じてきたわけではないはず」<sup>(32)</sup>だと述べる。沖繩問題が文化の問題であるとする大城は、日本・本土を相対化し、追従ではない復帰の実現のため、豊饒な文化性を前面に出し、その理解の深化によって自律性を保つべきだとする。

そして、例えば大城は依頼された講演の原稿においても「沖繩問題は文化面としてとらえなければ、永遠の解決にはならない」と記している。講演という広く聴衆に声を届ける場においても「文化」の重要性が発信され、さらに大城は「文化面からみた」というのも一部のこととは限らない、「まず沖繩の歴史を二つの性格からとらえてみたい」として「1・本土にたいする民族統一の潜在志向にささえられながら、本土から観念的差別によって矛盾と挫折に苦しんできた」、「2・本土への統一志向のかたわら、独自に海外文化を吸収咀嚼してきた。その独自の文化を本土へ影響させることなく、本土から影響をうけた」<sup>(33)</sup>とする。ここでも、沖繩の歴史をふまえ、そこから文化の相対性に視座をもつ必要性が説かれるのである。「主体性」と「文化」という鍵概念は以下もふくめ何度も繰り返されるのである。

主体的に文化財を護つたということではなく、国の「庇護」で

誇りを持たされた、という「国恩」に転化するからである。それが一つ。さらにもう一つは、その保護をもって沖縄の誇りの維持がすべて完結してしまうような感じを民衆的にいだかされてしまうこと、これが危機になり得るのである。／総括していうならば、主体から発生しない文化財保護はほとんど文化史創造には無効であろう、ということである。<sup>(24)</sup>

「本土の沖縄化」という言葉がある。いやな言葉である。核基地をそのままに返還することは、本土の沖縄化になることだから反対、という。理屈はわかるにしても、感覚的に私などは、核の危機を沖縄にだけおしつけておいて安住している本土の「ゴイズム」を見る。(中略)根は沖縄文化への自信のなさであり、日本文化への盲目的の信仰である。／(中略)沖縄の文化は日本の文化と同根である、とさきに書いたけれども、同時にある留保をつけるべきことにもふれた。この留保というのが、われわれの本土にたいする異質感を意味する。<sup>(25)</sup>

これに対し、大江は例えば以下のように反応している。

「大城さんの批判はボクにも痛いんです」と大江氏はいう。大城氏がいたいのは、本土ヤマトへの「同化志向」である。本土志向は琉球処分以来、沖縄の心情を支配してきた。沖縄戦の抵抗も大和人以上に大和人になろうとした沖縄人の悲惨な「自己証明」だった。それに対して今、反省が始まっている。<sup>(26)</sup>

大城の歴史性をふまえないがらの言説構築を理解しつつ、一方で〈核〉という問題を切り離しては、沖縄の問題は考えられないようである。広島、長崎への核の投下、戦後の日本の民主主義への問い、沖縄への態度、アメリカとの関係にみられる核兵器の所有と世界との対峙の仕方が大江の関心であり、「逆に「核アレルギー」というような、その成りたち自体からいかがわしい鈍感な言葉によつて、核保有国の強権ともどもわが国の強権が、われわれにむかつてきうなどころのことは、こうした核戦争の脅威への想像力を鈍らせ、ついには除去することである」<sup>(27)</sup>と述べる大江は、それゆえに「想像力」を喚起するために、創作の場にも向き合おうのであった。

## 五、おわりに

本稿では大江健三郎の『沖縄ノート』と沖縄の反応について述べた。

大江健三郎は当事者性と「想像力」をもって対象に「光」をあてることを目指し、自らのアイデンティティ、つまり「日本人とは何か」という問いに、日本人としての自らを相対化しながら向き合った。沖縄の本土復帰という問題に関しては、言説の多様性を民衆に限らず、知識人にも注目しながら考えた。沖縄の抑圧の歴史が反復されることへの危惧があり、それゆえ歴史の偉人、明治期以降の言論人へも着目し沖縄内部における多様な解釈へも目配りを怠らない。一方で、それは原罪意識ゆえに沖縄の運動の負の側面をみないとの批判を新川明から受けた。

大江は差別意識の持つ歴史的な他者性をふまえ、日本と沖繩の断裂が拡大しないためのアイデンティティを模索し、そのうえで日本人とは何かを問う。そのとき沖繩は思想において、本土に属するのではなく、本土が沖繩に連なるような状態を思考する。基地負担などの現実をふまえるならば、アジア戦略の地図上において沖繩は大きな意味を持ち、本土はその庇護下にある。そのような歪な環境を直視し、心的な痛みとの共有（沖繩の被爆者、復帰運動の実践者、歴史をほりおこした苦痛と向き合う演劇人たち）を試みながら、逆照射される自己と対話しつづけるのが大江であっただろう。

だがその対話は、内側へと向かい、外（大城）との間には隔たりも感じられる。沖繩問題は文化問題であるとすると大城立裕は、現実には浮上する沖繩の問題について、別個には経済や人権の問題であることを認めたくえ、そのような出来事に対抗するためのアイデンティティの重要性を提唱しつづけた。それは教育による沖繩の精神、郷土の理解、自立志向の内在化である。沖繩人が（運動）として行動を起こす、その思想の根底にも内地の影響を見出し、決して自然に、自律的に行動が起ったわけではないと理解する大城は、本来沖繩が（同祖論）（伊波普猷）を内在化し、その可能性を拡張しえたであろう共同体的関係性が、薩摩の侵攻や、いわゆる琉球処分をめぐる、本土からの差別意識に直面し、瓦解したと理解する。したがってその本土による差別意識は批判の対象になるのであるが、それ以上に、その差別に対抗するだけの自文化へのゆるぎない誇りや郷土の理解をめくり、（沖繩である）ことの自立性を内面化することで、本土に對置できると考えた。

大江健三郎の沖繩や（核）をめぐる思考の在り様に対する沖繩

からの対応に着目することで、復帰問題が前景化する沖繩の言説を、大江をとおして相対化する可能性を見出せたのではないかと思う。

## 注

- 1 鶴飼哲夫「追悼抄——喜びと共生根幹に」（『読売新聞』二〇二三・六・二四）
- 2 大江健三郎「核時代の想像力」（『核時代の想像力』新潮選書、二〇〇七・五、一二二頁）
- 3 大江健三郎「あいまいな日本の私」（『あいまいな日本の私』岩波新書、一九九五・一、二二頁）
- 4 大江健三郎「核基地に生きる日本人」（『世界』一九六八・一／『大江健三郎同時代論集2』岩波書店、一九八〇・一二、二二四頁）
- 5 「原水爆禁止世界大会」への参加と時期の重なる長男光氏の誕生は大江にとって重要な出来事であり、「私は広島・長崎における原爆体験と、核時代に生きることの意味について、一連の評論活動と、それともなういくらかの社会活動を行ってきましたが、その場合も、障害児と共生する人間の視点が私にとっての基本的なモチーフでした。家庭における、障害児が持つている「癒し」の力ということから、私は核時代の病んだ社会に対する、被爆者の「癒し」の力を考えるにいたしました。すくなくともいま広島・長崎で核兵器廃絶のために発言し、活動している被爆者たちに——かれらはすでに老年ですが——、社会全体あるいはこの惑星の人間全体に対する「癒し」への積極的なねがいを見てとらぬわけにはゆきません」（『北欧で日本文化を語る』『あいまいな日本の私』岩波新書、一九九五・一、一八三〜一八四頁）とあ

るように、共生と「癒し」という問題が提起されていく。

- 6 前掲(4)書、二一六頁
- 7 大江健三郎インタビュー／佐々木誠「沖繩ノート」の大江健三郎氏(『読売新聞』一九七〇・一〇・二)
- 8 本稿では『大江健三郎同時代論集2』(岩波書店、一九八〇・一二)を用いる。
- 9 我部政明「核と沖繩」(『沖繩を知る事典』編集委員会編『沖繩を知る事典』日外アソシエーツ、二〇〇〇・五、一三二〜一三三頁)
- 10 新川明「大江健三郎への手紙」(『反国家の兇区』現代評論社、一九七二・一一、四九頁)
- 11 岡本恵徳「沖繩ノート」論(『沖繩文学の地平』三一書房、一九八一・一〇、参照)
- 12 岡本恵徳「大江健三郎『沖繩ノート』を読む」(『駱駝』一九九五・七)
- 13 柴田勝二「大江健三郎と沖繩」(『叙説XV』一九九七・八、一六七頁)
- 14 大田昌秀『醜い日本人』(サイマル出版会、一九六九・一、三九〜四〇頁)
- 15 新城郁夫「沖繩を聞く——大江健三郎『沖繩ノート』」(『沖繩を聞く』みず書房、二〇一〇・一二、一七七〜一七八頁)
- 16 北山敏秀「大江健三郎『沖繩ノート』における歴史意識の交差——新川明の「沈黙」に吸引される言葉」(『日本近代文学』二〇一五・一一、一〇二頁)
- 17 村上克尚「沖繩」とともに生きるために——岡本恵徳『沖繩ノート』論を読む(『アジア太平洋研究』二〇一六・一一、一六頁)
- 18 『同化と異化のはざまで』(潮出版社、一九七二)など参照。
- 19 大江健三郎、大城立裕対談「沖繩の人権問題」(『沖繩タイムズ』一九六八・一〇・二四、不鮮明な箇所は●で示した。以下同様)
- 20 大城立裕「大江健三郎著『沖繩ノート』」(『エコノミスト』一九七〇・一〇・二〇)／『私の沖繩教育論』若夏社、一九八〇・四)
- 21 大江健三郎、大城立裕対談「アジアの中の日本人——沖繩返還を前に」(『沖繩タイムズ』一九七二・一一)
- 22 大城立裕「正直になろう」(『沖繩経験』一九七二・一)、引用は『私の沖繩教育論』(若夏社、一九八〇・四、一〇四頁)によった。
- 23 大城立裕「文化面からみた沖繩問題(講演原稿・手稿)」(沖繩県立図書館蔵)
- 24 大城立裕「同化と異化のはざまで」(『同化と異化のはざまで』潮出版社、一九七二・六、二二頁)
- 25 大城立裕「日本による植民地支配の原図」(『同化と異化のはざまで』潮出版社、一九七二・六、四七頁)
- 26 「大江健三郎氏と一時間——季刊『沖繩経験』を創刊して」(『読売新聞』一九七二・七・二四)
- 27 大江健三郎「核基地に生きる日本人」(『世界』一九六八・一／『大江健三郎同時代論集2』岩波書店、一九八〇・一二、二二五頁)